

“マイノリティ”に対する支援の考察を通じて、共同体のあり方を模索する ドイツ連邦共和国(フライブルク・ベルリン) 2020年2月17-23日

中芝健太 (健康総合科学科公共健康医学専修4年)

企画の動機

私は、特に公衆衛生倫理の授業を通してundocumented immigrant(非正規移民)に関わる倫理的問題と彼らの健康状態について考察した。その中で問いは、共同体はどのように人々と関わるのか、その中で社会的支援の役割は何か、ということであった。そこでいわゆる“マイノリティ”についての議論が多いドイツで研修を行うことを企画した。



← 知の伝統を持つハイデルベルクの旧市街
壁の崩壊後まだまだ開発中の新しい街ベルリン →



2つの目的

- ①ドイツにおいて難民、女性、AIDS患者のような“マイノリティ”とされることの多い方々に支援を行う団体でその実情を伺い、支援体制・過程の理解を目指す。
- ②社会と支援の関係についてディスカッションを深め日本でもどのような議論が可能なのかを模索する。

訪問とディスカッションにあたっての論点の軸

支援を考える論点の軸として、支援を受ける人の人権を守るためという人権アプローチと労働力確保や感染症流行予防のような効率性アプローチというロジック構築の方法の区別(Widdows & Heijeet 2015)、包括的支援と草の根的支援という区別を想定し、その軸を持って各施設を訪問した。
Widdows & Heijeet (2015) "A Global Public Goods Approach to the Health of Migrants" Public Health Ethics, Vol. 8, 121-129.

日付(場所)	伺った方・機関	伺ったこと	考えたこと
2月上旬 (東京)	0. 移民の方々の コミュニティ訪問	・移民のための自助組織の定期的な集まりに伺った。移民についての研究者の方からの講演ののち、メンバーのそれぞれの方が、「アフリカからきて支援を求めている移民の知人がいる」「NPOの集まりがあるが、移民コミュニティの方々にぜひ参加してほしい」など多様な情報を交換されていた。	・メンバーの参加動機が多様で特定の目的があるわけではなく、「集まることの楽しさ」がコミュニティを動かしていた。 ・草の根的な活動を行うコミュニティであるが、誰か特定の強いリーダーがいるわけではなく、内部からおのずと組織化されており、さまざまな活動も自発的に広がりを見せていた。
2/18 (フライブルク)	1. Frauen helfen Frauen (女性が女性を助ける)訪問	・女性スタッフのみで構成されており、DVなどを受けた女性を支援する団体であった。 ・リーチできる対象に限りがあり、弁護士・クリニックの医師・教会などと連携を深めることでさらに多様な層にアプローチしていきたいとお話を伺った。 ・女性や移民に対する支援の話題から、ドイツの政治哲学的背景についてお話しした。	・草の根アプローチだが、性的虐待を受けた人は他の機関に繋ぐなど支援のネットワークを構築しており、より包括的に支援を提供できていると感じた。 ・女性や移民といったテーマについて、多くの人が自分の意見を主張していた。「ドイツはリベラルな国だ」と誇りを持って仰る方もおり、日本とドイツの異なる歴史的・社会的背景による「リベラルな議論の環境」の違いは支援の違いに影響していると感じた。
2/19 (フライブルク)	2. AIDS-Hilfe Freiburg (エイズ支援 フライブルク)訪問	・HIVに関する相談機関で、必要な他のサービスに架橋する活動を行なっている。 ・二人の教育専門家の方にお話を伺い、差別をめぐる問題を中心に議論をさせていただいた。	・エビデンスに基づくロジック構築に底流する政治的背景について、意識的に考える必要があると感じた。例えば、「移民の方のHIV有病率が高い」という事実を、一部の極右勢力は排斥の根拠として用い、支援を行う方はより手厚いケアが必要である根拠として用いていた。
2/19 (フライブルク)	3. Refugium Freiburg 訪問	・シリア・アフガニスタン系の移民の方を中心とした相談窓口の機関で、NPO法人や関係施設が形成する支援のネットワークの窓口となっていた。 ・教育・社会学・心理学などの専門家が中心となっており、ソーシャルサポートへ架橋を特に重視されていた。	・メール一つで多言語でのアクセスが可能であり、無料でサービスを行なっており、アクセシビリティが担保されていると感じた。 ・ネットワークとしての支援を提供されているが、法的地位が未確立であることなど、支援の継続性には課題を抱えているようであった。
2/20 (ベルリン)	4. シリア系難民で 移民向けアプリを開発した方へのインタビュー	・移民の方が行う政府の煩雑な書類を一括して翻訳するアプリを開発された方に話を伺った。 ・6ヶ月間も歩き続けてシリアからドイツに移動してきた苦労や、ドイツの難民政策に対する考えなどを伺った。	・社会が移民を受け入れる論理として「共同体への利益」を考量することについて考えた。彼は移民として入国し、認定され、成功したロールモデルであり、包摂が社会への効用をもたらした例である。一方で、そのような「効用」をもたらさない人々と社会の関係についても意識的に考える必要があると感じた。
2/21 (ベルリン)	5. 移民をテーマとした ディスカッションプログラム 参加	・ボランティアによる移民向けのドイツ語教室(居住権獲得を目指したもの)に参加し、移民の方が実際に感じる苦労を伺った。 ・その後、難民キャンプで働いている人や難民支援の取り組みをされている方々の意見交換会に参加した。	・移民や難民というテーマについて、さまざまな立場の人が自分の意見を熱弁していた。必ずしも何かの専門家ではない方々も自らの言葉として語るべきものを持っており、情熱的に私とお話しにも付き合ってくださいました。ここでも市井のレベルで移民等の支援に関する問題意識が浸透しているように感じた。

研修を通して考えたこと

さまざまな方と議論させていただく中で、「ロジックの構築」「さまざまなステークホルダーの連携」が共同体における“マイノリティ”支援を考えるにあたりキーワードになると感じた。その素地として、熟議を可能とする環境の醸成が有効であると考えた。特定の立場に固執しない複数のアプローチから議論することで、ロジックの不断の組み直しと多様な立場の折衷を実現できると希望を持つ研修となった。

謝辞

今回の研修にあたり、さまざまな方に人から他ならぬご支援をいただきました。訪問させていただいた、東京・ドイツの諸機関・団体・アプリ開発者の皆様、お知り合いを紹介くださった早稲田大学の加藤丈太郎先生、研修内容についてご指導いただいた医療倫理学教室の中澤先生、研修の最初から最後まで親身にご相談に乗ってくださった泉先生に心より深謝申し上げます。